

氏 名	まつ だ み か 松 田 美 佳
-----	---------------------

(論文内容の要旨)

本論の目的は、マイスター・エックハルトの「生の教説 *Lebenslehre*」(一般的な表現では倫理学・倫理思想)を、『神学大全』におけるトマス・アクィナスの倫理学と比較することによって、思想史的脈絡のうちに位置づけるところにある。エックハルトの生の教説に関わる先行研究においては、トマス倫理学との相違ないし非連続性が注目されることはあっても、類似ないし連続性が十分に考察されることはなく、またトマス倫理学と比較対照する際の着眼点もいくつかの個別の主題に限定されている。先行研究のそのような非完全性を越えるべく、本論は、トマス倫理学との連続性と非連続性の両面を視野に入れるとともに、トマス愛徳論とエックハルトの神の放下の教説との本質的連関に注目することによって、トマス倫理学とエックハルトの生の教説との全面的・根本的な比較を行う。

本論の第一部(第一～四章)では、トマスとエックハルトの連続性に強調点が置かれ、第二部(第五～七章)では、両者の決定的な相違点を取り出される。各章ごとの論点は以下の通りである。

第一部 エックハルトによるトマス理論の再構成

第一章では予備的考察として、トマスとエックハルトの存在概念が比較される。すなわち、トマスが「存在」に関して用いている三つの相互に異なった概念がエックハルトにおいてどのように受容されているかが考察される。それら三つの概念とは、(1)「現実性 *actualitas*」としての存在、(2)「全体的存在 *totum esse*」、(3)「生成 *fieri*」に対する意味での存在、である。トマスでは(1)は神と神以外のものを規定する連関、(2)は無からの創造を論じる連関、(3)は保存を論じる連関で用いられる。エックハルトの存在概念は、トマス存在概念の(1)と(2)の両方を意味するとともに、神の単純性と完全性という概念をも含意する。他方、エックハルトにおいて(3)は重要性を失う。このように、エックハルトの存在概念の独

自性は、トマスの存在概念を構成し直したところにある。

第一章での予備的考察に引き続き、第一部の残りの三つの章では、エックハルトの生の教説の特徴をなす三つの主題が、対応するトマスの議論と比較される。

第二章では、「何故なき生と働き」というエックハルトの思想が、トマスの「生」と「意志的な働き」の概念および目的論との関係で考察される。ラテン語・ドイツ語両著作における議論を丹念に追うことによって、エックハルトの「何故なき生と働き」の思想が、トマスの「生」と「意志的な働き」の概念を再構成することによって形成されるということが明らかにされる。また、エックハルトの「何故なし」の思想が、トマス目的論を構成する二つの原則を受容するとともに、それらをトマスとは異なった仕方で理解するものである、ということが明らかにされる。すなわちエックハルトは、第一の原則である「働きの自発性」を目的という観点からより根源的に考えるとともに、第二の原則である「働きの目的志向性」の目的を内在的現代的なものとして考えている。その意味においてエックハルトの「何故なき生と働き」は、トマスの目的論をその極限にまで発展させたものと見なされうるのである。

第三章では、トマスの「責任倫理」とエックハルトの「心情倫理」とが単純な対立関係にあるのではないということが示される。トマスは、「外なる働き」である行為にそれ自体としての善性を認め、外なる働きの善性が意志の「内なる働き」の善性に附加すると考えており、その意味では確かに「責任倫理」を主張している。しかし他方でトマスは、行為の善悪の本質的規準をあくまでも意志の内なる働きに認め、また、意志の内なる働きが完全であるなら、能力の欠如のために外なる働きの善性が外界に実現されなくても意志の善性は減らないと主張する。したがって、トマスの責任倫理は「行為義認論」ではない。これに対してエックハルトには、外なる働きの善性が内なる働きの善性に附加しないという発言が見られ、よって彼の倫理は確かに「心情倫理」と特徴づけられうるが、他方でエックハルトには、外なる働きを「質料と状況」についての理性的判断についても強調する側面もあり、またエックハルトの「外なる働き」の善性否定の論拠はトマスから受容されたものでもある。したがって、エックハルトの心情倫理は決して「静寂主義」ではなく、ト

マスの責任倫理に必ずしも対立するものではないのである。

第四章では、「活動的生と観照的生」についてのトマスの議論との比較を通して、エックハルト・ドイツ語説教八六の「マリアとマルタ」解釈の形成過程が解明される。トマスは、「マリアは良いほうを選んだ。それをとりあげてはならない」というキリストの言葉に依拠しつつ、端的には観照的生のほうが活動的生よりも優れており、より大きな功績に値する、と主張する一方で、ロマ九・三を引き合いに出しつつ、必要事がある場合には活動的生のほうが観照的生よりも優先され、神的愛が満ちあふれる場合には「一時的に」観照を離れることが観照に留まるよりも大きな功績に値するという留保を加えている。まさしくこのような留保を受けて、エックハルトは『教導講話』第一〇章で、やはりロマ九・三に触れつつ、活動的生の状況的優越性についてのトマスの議論を再現する。そして説教八六においてエックハルトは、「愛の本質」と「愛の作用・あらわれ」との違いに関する『教導講話』第一〇章の議論を「マリアとマルタ」の両者に当て嵌めることでトマスの留保の内に見られた方向を徹底し、トマスのように活動的生の単に状況的な優越性を主張するにとどまらず、観照的生の原則的優越性を否定するに至ったのである。

第二部 トマスの立場からの訣別

第二部の三つの章では、トマス『神学大全』の愛徳論に関連する三つの主題——すなわち「罪の悔い」「神の放下」「隣人愛」——が取り上げられる。

第五章では、「私は自分が罪を犯さなかったことを意志しない」というエックハルトの言説が、トマスの痛悔論との関係において考察される。研究者ルーは、エックハルトは悔いによる内面的破滅を避けるために悔いの解消を説いたと見ているが、この解釈は、トマスが悔いによる内面的破滅の危険性を認識しつつも悔いの解消を主張しないという事実を鑑みれば論拠不十分である。また、研究者ピーシュは、エックハルトの当該の言説を「神の救済計画」に対する賛美として捉えるが、この解釈も、トマスが神の摂理によって悪を機会として善が実現されることを認めつつも、善を妨げる過去の罪についてはあくまでも痛悔すべきであると主張している事実

鑑みて説得的ではない。悔いに関するトマスとエックハルトの見解の相違はむしろ、我意についての両者の見解の相違を背景としている。トマスの場合、人間は、自分の善であるからこそ神を愛するのであり、逆に自分の悪を招く罪については悔い続けるべきである。すなわち、トマスは、自分の善を意志する我意（欲情愛）を肯定するからこそ、悔いの継続を説くのである。それに対して、エックハルトは『教導講話』第一二章において、罪を赦す神の愛によって我意が解消されることに注目するがゆえに、悔いの解消を説くのである。

第六章では、ロマ九・三「実際、わたしの兄弟、肉による同族のためなら、わたしのこの身がのろわれて、キリストから離されてもいとわない」に関するトマスとエックハルトの解釈が比較される。トマスは『神学大全』第二部の二の愛徳論で、ロマ九・三についての二つの解釈を列挙しており、そのうちの第二の解釈は、パウロのことばを、神への愛に対する隣人愛の優位ではなく、自己愛に対する神への愛の優位を裏付けるものとして解するものである。すなわち、パウロは隣人が神を愛するようになることによって神の栄光が促進させられるために、自分が神を享受することを「一時的に」断念したと解するわけである。このような解釈の背景には、自己愛と神への愛の関係についてのトマスの見解がある。すなわちトマスにおいては、確かに人間は神を神のために愛するのであり、自分より神を愛するのであるが、同時に、自分の善が神に依存しているから神を愛するとされる。したがってトマスにおいては、愛徳の内に、神の至福への分有という自分の善を欲する欲情愛が含まれるのである。そして、愛徳に自己愛が含まれるがゆえに、トマスのロマ九・三解釈においては、神の享受の断念が「一時的」と限定される。それに対して、エックハルトは『神の慰めの書』で、パウロのことばを神への愛に対する隣人愛の優位と解しないというトマスの基本的理解を受け継ぎながらも、「一時的に」という留保についてはそれを拒否する。

トマス解釈へのこのような批判の背景にあるのは、神の意志への同形相性についてのエックハルトの独自の見解である。すなわち、トマスが個別的善の意志を否定せず、それを神の意志への同形相性に含めているのに対して、エックハルトは『教

導講話』第一章において、個別的善への意志——それがたとえ神自身や永遠の生を意志するものであっても——を我意として脚下して、神の意志を求めるべきことを説く。さらにまた『神の慰めの書』では「徳の内なる働き」について論じられるが、その働きは、神を愛するがゆえに、神のために苦悩し続けることを意志するとされる。エックハルトは、徳の内なる働きについてのこのような理解のゆえに、神から離れている苦悩の甘受を一時的なもののみならず拒否し、トマスのロマ九・三解釈を批判したと考えられる。トマスのロマ九・三解釈に対する批判はドイツ語説教一二にも見られる。そこでの表現や議論にもトマスからの影響が認められるものの、トマスにおいては神的善への分有を意志する欲情愛が愛徳に含まれるのに対して、エックハルトがロマ九・三のパウロの在り方に見るのは、そのような欲情愛を否定し神への純粹な友情愛を実現した在り方なのである。

第七章では、トマスの隣人愛論とエックハルトの隣人愛論を比較する。トマスが自己愛の優位を主張するのに対して、エックハルトは自己愛と隣人愛の同等性を説く。トマスによると、人間は隣人が至福を分有することよりも自分が至福を分有することを意志しなければならないが、エックハルトによると、隣人を自分のように愛する人間は、隣人の栄光を自分の栄光と同じように享受するのである。隣人愛に関する両者の見解のこのような相違は、愛徳の性格に関する両者の見解の相違と連関している。トマスによると、愛徳は、神の愛である聖霊の分有ではあるが、聖霊自身ではなく、あくまでも魂の附帯的能力態であって、それゆえ欲情愛の対象になりうる。すなわち、愛徳は他の徳や至福と同じように、人間が自分に意志すべきものであり、隣人によりも自分に意志すべきものである。隣人愛に対する自己愛の優位についてのトマスの主張はこのような考えに基づいている。それに対して、エックハルトによると、愛徳は魂を基体とする附帯性ではなく、魂は愛徳に対して、附帯性が基体に内在するように内在するものであり、それゆえ愛徳は欲情愛の対象にならない。そして魂に内在しない愛徳をエックハルトは、神の愛である聖霊と同一視する。このような考え方に基づいてエックハルトは、諸々の徳や功績を自分のものや誰かのものとしてではなく、それ自体として愛すべきことを説く。自己愛と隣

人愛との同等性の主張はまさにこのような考えに基づいている。

またエックハルトは、愛徳だけではなく徳一般と人間との関係について、実体と附帯性との関係を「逆転」させる。「実体」「附帯性」という概念枠組みを踏襲しながらもその内実を「逆転」させるというこのような議論は、アリストテレス倫理学のいわば非アリストテレス的応用とみなされうる。この意味で、エックハルトの生の教説は、アリストテレスの徳倫理を受容したトマスの倫理学と徹底的に「対話」することを通じて、アリストテレス主義を乗り越えたとともに、アウグスティヌスのプラトン主義をもアリストテレス主義によって修正したものであるとみなされうる。これが、エックハルトの生の教説の思想史的位置づけに関する本論の結論である。

氏 名	まつ だ み か 松 田 美 佳
-----	---------------------

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、マイスター・エックハルトの「生の教説」をトマス・アクィナスの『神学大全』における倫理思想と比較し、それによってエックハルトの生の教説の思想史的な位置づけを試みたものである。エックハルト思想とトマス思想との比較はこれまでさまざまな研究者によってなされてきているが、論者は、これまでの比較研究が個別的な主題に限られており、両者の相違点に関心が集中してきたことを批判し、両者の全面的で根本的な比較を企図したのである。その結果、エックハルト思想とトマス思想の連続性が改めて浮き彫りにされ、エックハルトの生の教説がトマスの倫理学と徹底的に対話するなかで形成されたものであることを明らかにした。つまり、エックハルトの生の教説は、アリストテレス徳倫理を乗り越えるとともに、アウグスティヌスのプラトン主義をもアリストテレス主義によって修正したものであり、そういう仕方でもトマス倫理学の観照的・学的性格を乗り越えたものである、というのが論者の結論である。

まずこの本論文の企図と成果が、高く評価されてしかるべきである。これまでのエックハルト研究は、彼の生の教説に照準を合わせる場合でも、思想史的連関を副次的なものとする傾向があったことは否めない。エックハルトの思想はキリスト教神秘主義の最高峰として多くの研究者の関心を集めてきたが、二〇世紀の宗教研究の展開のなかで、世界のほとんどすべての宗教的伝統において何らかのかたちの神秘主義が見出されるということが注目されるようになった。つまり、神秘主義的体験のなかに汎宗教的で通文化的な人間経験の根源的事象を見出そうとする動きが生じてきた。京都学派の流れを汲む日本のエックハルト研究は禅の経験と照明し合うことによって、むしろ神秘主義という枠を超えた人間の原経験に肉迫してゆく方向に進むのであるが、思想史的連関よりも、経験の事象そのものの内的連関の解明を重視するという傾きはそこでお顕著に認められる。このような傾きをもつ研究が深く豊かな知見をもたらしてきたことは確かであるが、そこにはやはり欠落した側

面があり、論者はまさにその欠落した側面に光を当てようとしたと言える。

そのために論者は、エックハルトを神秘家(Mystiker)として扱うべきか否かという問題には立ち入らず、エックハルトを倫理学者(Ethiker)として扱うという態度をとる。この態度のもとに、エックハルトのラテン語著作およびドイツ語説教を、トマスの『神学大全』の叙述と比較するという方法が有意味となる。そして、本論の第一部において、論者はトマスとエックハルトの存在概念の比較という予備的考察を経た上で、「何故なき生と働き」の思想、意志の「外なる働き」の善性の否定、観照的生に対する活動的生の優越という、エックハルトの生の教説の特徴をなす三つの主題をトマスの論述と比較し、その結果、エックハルトの生の教説がトマスの諸概念や諸原則を継承しており、トマスの理論の再構成という一面をもっていることを明らかにする。さらに論者は第二部で、罪の悔い、神の放下、隣人愛という『神学大全』の愛徳論に関連する三つの主題についてトマスとエックハルトの議論の比較を行い、エックハルトがトマスの思想を受け継ぎながら、ある地点でトマスの立場から訣別していくことを、明らかにする。以上の二部構成の論考は、丁寧な読解と先行研究を参照しつつなされる明晰な分析とによって、説得力に富んでいる。そこで導き出される上記の結論も読者を十分に納得させるものであり、今後のエックハルト研究に一石を投じたと評価することができる。

とはいえ、そもそも比較という方法はトマスとエックハルトの思想史的な連続性を明らかにするのに有効であるが、非連続性の解明には限界をもっている。比較によって、エックハルトの思想がどの点でトマス思想を受け継ぎ、どの点でトマス思想と異なるかということは解明できても、エックハルトの新しい独自の立場が何処からどのような必然性をもって打ち出されてくるかということは明らかにならない。比較という方法のもつこの限界が、本論文の限界にもなっている。論者はエックハルトがトマスの立場から訣別していくことを論じながら、トマス思想という基盤から飛び立って独自に深まってゆくエックハルトの言説に付き従ってゆくことはできなかった。

ただし、このことは本論文の限界であるにしても、欠陥ではない。何故なら、ト

マス思想との比較という方法をその限界を含めて、忠実に遂行することが本論文の目的だからである。本論文はその役割を全うしている。したがって、エックハルトの思想の決定的な独自性を明らかにすることは、本論文以降の論者の課題であると考えられる。その課題に関して、本論文のなかで特に示唆的であるのは、第一部第一章のトマスとエックハルトの存在概念の比較である。エックハルトがトマスの存在をめぐる三つの概念を受け継ぎながら、それらを独自の仕方で重ね合わせるとともに、トマスとは別の仕方で用いていると、論者は言う。これはきわめて重要な指摘であり、さらに展開されるべき可能性に満ちている。論者の今後の研究に期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年12月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。